

富田林の自然

人と生きものがひびきあう
里山をめざして



No.10
2012 年 3 月

富田林の自然を守る市民運動協議会

目 次

知識と知恵の融合

岸 本 忠 三・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

中野町の竹林を地域の憩いの場に・・・・・・・・・・・・・・ 2

石川と日本と私

篠 沢 健 太・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

石川の生き物講座&自然観察会

寺 川 裕 子・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

「里山の緑（東部丘陵地）」の詳細調査

～ H23 年度「自然環境保全活用調査その10」報告書より抜粋～・・・・・・ 16

2011 年度 協議会事業報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27

協議会参加団体の活動紹介

金剛の自然環境を守り育てる会、富田林の自然を守る会、特定非営利活動法人 里山倶楽部、
石川自然クラブ、富田林勤労者山岳会「嶽の会」、竜泉里山クラブ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32

表紙の写真

雑木林の下樵り

長い間樹木が伐採されことなく放置された雑木林は照葉樹林化への遷移が進み、コナラなどの落葉広葉樹の高木の下層にヒサカキなどの照葉樹の小低木が茂り林床が薄暗くなる。これらを除伐することが里山保全活動の定番である。写真は昨年8月、奥の谷で行われた国際ワークキャンプでの下樵り風景である。

知識と知恵の融合

岸本忠三

富田林市名誉市民 元大阪大学総長

発見の上に発見が積み重なり、科学技術はとどまることなく進展する。100年前の物理学や生物学の大発見は今や小学校や中学校の教科書に記載され、誰もが知っている知識となっている。このように科学技術のとどまることのない進歩が我々の生活を豊かにし、経済の成長にもつながった。100年前40才台であった我々の平均寿命は80才台へ伸びた。



何万年か前にヒトは火を使うことを覚えた。これが我々の生活を豊かにしたことはいうまでもない。科学の進歩は我々が原子の火を使うことまでも可能にした。知識の上に知識が積み重なり、産業は振興し、経済は成長し、我々の生活は豊かになった。しかし知識の上に知識は積み重なり進歩していくが、我々の知恵や感性は学ぶことが出来るものでない。例えば科学技術の成果は次の成果につながっていくが、芸術はその芸術家だけのものであり次の人へと積み重なっていくものでない。従って数百年前の音楽や絵画でも決して古くはならないし、我々に感動を与え続け、それを超えるものも出てこない。

このように考えてみると知識と知恵が乖離していくことが光と共に影を生み出してくる。原発事故はその1つの典型例であろう。産業振興や経済成長のためにという名の下に日本の自然も破壊が進み、自然環境も多くの場所で損なわれた。1つの動物あるいは植物の消滅は自然のリンクを壊し、何万年続いてきた地球環境に影響を及ぼすことを我々はよく知っている。

21世紀に入ってテロや震災、格差等々の問題を1つの契機として我々は知識と共に知恵の重要性を認識し始めた。その1つが自然環境を取り戻そうという考えの広がりであろう。多くのボランティアの人々の熱意によって金剛、石川を持ち、豊かな自然を誇る富田林が多くの人々を惹きつける緑豊かな地域として益々発展していくことを楽しみにしたいと思う。

岸本忠三氏のプロフィール

1939年（昭和14年）富田林市に生まれる。元大阪大学総長、大阪大学名誉教授。インターロイキン-6の発見者で、関節リュウマチの治療薬を開発。免疫学の世界的権威として知られている。1998年、文化勲章を受賞。2009年、日本人初となるクラフォード賞を受賞。富田林市中野町在住、富田林市名誉市民。協議会が整備している中野町の竹林の所有者。

中野町の竹林を 地域の憩いの場に

中野町2丁目の新堂交番の背後に、元弘年間に楠正成の千早城、赤阪城を守る出城の一つとして伝えられる城跡で、近年は畑として使用されていましたが現在は竹林となっている約5,400 m²の小高い丘があります。太古の石川の河岸段丘崖の一部です。この竹林を整備し、生物多様性に配慮した自然豊かな憩いの場にしようという試みがなされています。協議会の事業として地域の方々にも呼びかけて、ボランティアの手で進められているものです。2009年から手がけられていますが、最近、台湾やフランスの若者の助けも得てやっとその形が見えてきました。これまでの取り組みを以下に写真で紹介します。

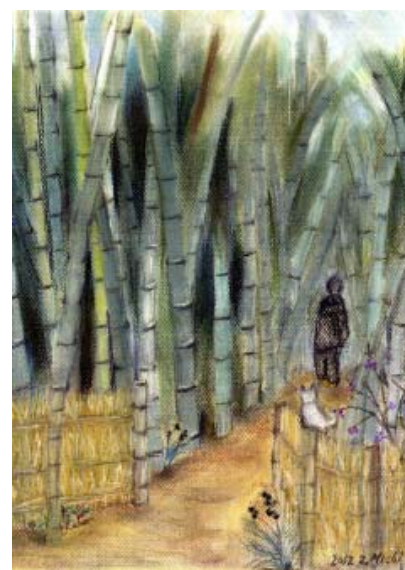


竹林の場所 (googl map より)

竹林の整備計画



- ・竹林内に散策・作業用の踏み分け道（幅60cm程度）を設ける（山裾の水路沿い、交番～山頂～北側出入り口など）
- ・竹林内への出入り口を3ヶ所設ける（南側、東側、北側）
- ・南側の交番横に作業用の広場を設ける



完成後のイメージ図（正田美和子氏作）

富田林市緑の基本計画で河岸段丘崖の保全を位置づけ



石川に沿って、その西側に河岸段丘崖が延びており、今も所々に竹林を中心とした自然林が連なっています。市街地にわずかに残る自然として貴重な存在であり、また、中小企業団地周辺では工場と住宅地を隔てるグリーンベルトとして重要な役割を果たしています。

2007年に富田林市が策定した緑の基本計画においても、「既成市街地を縁取る緑の保全」として「河岸段丘崖の緑」が位置づけられています。中野町の竹林は河岸段丘崖の一部をなし、その中でも最もまとまった形で残る自然林となっています。

既成市街地を縁取る緑の保全：石川の段丘崖の緑

市街地を縁取る石川沿いの段丘崖の樹林は、工場と住宅を隔てる緩衝帯の緑としての役割を有し、生態的にも重要な富田林市特有の地形の記憶をとどめる緑であることから、今後、保全に向けて検討します。

(富田林市緑の基本計画より)



河岸段丘崖を調査

2008年6月に河岸段丘崖の調査を実施しました（「富田林の自然」No.7;2009参照）。これは中野町の竹林の東側の写真です。鬱蒼と茂った竹が水路に覆いかぶさり、一部は道路にまでとどいています。時には長い竹が道路を塞ぐこともある状態でした。



林内に入ってみると、一面、枯死した竹が縦横に倒れており、踏みこむことも困難な状態でした。林床には草本類は皆無の状態でした。



竹林整備作業を開始

2009年5月、東側の法面の竹の伐採から開始。



伐採作業が終了。すっきりとなった法面。





2010年6月の西側平坦地。5月に全面に茂る竹を伐採したが、若竹が生えクズなどの雑草が茂っています。東側法面も同様です。このまま放置すると元の木阿弥となります。年数回の草刈りが必要でと思われます。



寒い中の作業が終わって、あったかいみそ汁の差し入れにホット一息。

チッパーを導入

2011年10月、協議会は市からの補助で木材破砕機（チッパー）を購入しました。枯死した竹や伐採した竹をチップ化し歩きやすいように通路に敷きならしています。この機械の導入で膨大な量の竹の処理が大きく進んでいます。



台湾の青年が ワークキャンプ

2011年2月、NICE（日本国際ワークキャンプセンター）のグループキャンプとして台湾のボランティア団体のVYA（Vision Youth Action）から20人の若者が自然を守る会の活動に参加しました。2週間のキャンプのうち4日間、黒田さんのご厚意でお借りしている古民家（NICE事務所）に宿泊、寒い中、竹林整備に汗を流しました。



キャンプを終わって 台湾の青年たちと地域や守る会の人たち。



台湾の若者たちの働きで、困難に思われた竹林整備が大きく進み、東側水路沿いの通路と中央の通路が開通した。

フランスから 長期ボランティア

2011年11月から2012年5月までの約6ヶ月間、フランスの青年2人（ローラとイスマエル）がNICEの中長期ボランティアとして、NICEの下釜由子さんと共にNICE事務所（古民家）に宿泊、竹林整備を中心に活動、チップ作業などを精力的に行ってくれています

チップ作業をするイスマエルとローラ。左下の写真は左から石黒さん（NICE職員）、ローラさん、イスマエルさん、下釜さん →





フランス人中長期ボランティアたちによってチップを敷きつめ整備された竹林中央の遊歩道



奥の谷の山から採取した桜の苗木を記念植樹しました。

小学生も参加

新堂小学校の児童もボランティア授業で竹林整備に参加しました。



この事業は竹林の大部分の所有者である岸本忠三様をはじめ、竹林所有者の岸本忠二様、江川忠義様、田中澄子様のご厚意により使用の許可をいただき実施されています。また、竹林の近くにお住まいの黒田様から、NICEが古民家を無償でお借りして、NICEと自然を守る会が事務所を置きボランティアが宿泊するなど活動の拠点としています。また、大勢のボランティアが宿泊する場合にはお隣からトイレをお借りするなど多くの地域の方々から支えられて取り組まれています。

この活動は協議会参加団体のみならず、地域の方々、地元の小学生、NICEと台湾VYAやフランスの2人の青年など多くの人々の無償のボランティアによって進められています。これらすべての方々に深く感謝致します。

そして、この竹林が身近な自然を育み、地域のさわやかな憩いの場としてよみがえることを願っています。今後とも多くの皆様のご理解とご協力をお願いします。

石川と日本と私

篠沢 健太

(工学院大学建築学部まちづくり学科)

1. 日本の「今」と石川

私が大阪芸術大学環境計画学科に赴任したのは、1995年、阪神淡路大震災の年でした。それ以来、通勤途中にほぼ毎日石川を渡り、16年間を過ごしました。通勤時に見る石川に私は当初何も感じていませんでした…いえ、正直に言うと逆に反感すら感じていたのです。当時、ジャパニランドスケープという雑誌に投稿した記事のなかで、私は「石川の整備は川に背を向けている…」という文章を書いています。大学院で、河川の生態・景観特性と親水整備との関係を研究していた私にとって、通勤経路の石川は人工的にみえたのです。

大阪芸大で生活しはじめ、大学裏山の里山をテーマに美術、工芸、写真などの先生方と共同研究を進めていくなかで、「石川あすかプランを考える市民連絡会」の方々と知り合いました。そして徐々に通勤経路以外の石川を訪れるようになりました。当時私たちは植物の「種子」を芸術教育と研究のテーマにしていたのですが、種を探しに石川の河原に行くようになると、石川の自然が徐々にみえてくるようになりました。

石川には、多くの生きものが生息しています。風にそよぐ河原や水辺にはセイタカヨシ、オギ、ツルヨシ、チガヤ…。河川敷の凹地には、南河内地域では絶滅危惧種となっているミゾコウジュ。草原をすみかにする小さなカヤネズミ、食物連鎖上でそれを食べる捕食者であるコミミズクなどの猛禽類…。私たちのまちの身近に豊かな自然生態系がありました（毎年3月に石川自然クラブが主体となって開催する「石川流域フォーラム」において紹介しています。2012年は「石川の生き物事件簿」と題して、これらの生きものが生息する姿を、写真や標本で紹介しました）。

大阪府の「石川あすかプラン」やそれに対するさまざまな市民活動についてもだんだん判ってきました。その後、NPO「石川自然クラブ」に設立時から参加し、「反対」型の市民運動からより積極的で戦略的な府民共同型の活動へと進むようになりました。その過程でみえてきたのは、都市公園における自然という「新しい問題」と市民活動の「現実」でした。

大阪府営石川河川公園は「都市公園」です。都市の営造物公園（土地が公的に所有されている公園施設）として、広く一般の方々に利用価値を提供できることが主な目的です。そのため、国立公園や国定公園のような自然公園などの地域制公園（土地は民間所有だが、土地利用を規制・調整することにより豊かな自然環境を広く一般に享受できるようにする公園ルール）とは異なる対応が必要となり

ます。石川河川公園では、河川の幅が広く洪水の危険が少なく、かつ自然が豊かに残る区間を「自然ゾーン」という特殊なゾーンに指定しています。実はそれは、これまでの公園行政の中では先進的な事例でした。河川堤外地の公園としては、例えば国営淀川河川公園などの例もありますが、多くの公園では普段は河川の水がながれていない「河川敷」を公園として「占有」し利用しています。河川水辺、水際は公園範囲外で、河川管理者の管轄になるのです。ところが石川河川公園は河川水辺までを公園の範囲としています。これには、大阪府の公園行政に関わる方々の先見の明があったといってよいでしょう。確かに、公園利



石川河川公園



石川河川公園自然ゾーン

用と安全について、考えるべき課題は多くなりましたが、一方で自然の保全と利活用、公園利用とその他、営農活動などを幅広く、一貫して扱える素地ができました。

同時に防犯・防災など、河川や河川沿いの日々の生活の安全についてより真剣に考える必要が出てきました。自然を守ることが安易に、安全な生活を諦めることにはつながらず、その逆に安全な生活が自然を失うことに必ずしもつながらないことを強く意識し、両者の間の打開策を工夫してきました。とくに、日常ごく当たり前に使っている言葉の使い方を再認識し、お互いの主張を明瞭にして、誤解なく意志疎通出来ることを、この数年考えてきました。例えば「洪水」という言葉は、使われる場面ごとにその定義や内容が違います。しかし、これまで「洪水」の意味の違いを明らかにせず地域住民、行政が話をしていたため、思い浮かべる情景は違っていました。地域で生活する立場からすれば、護岸を越えて河川敷に水面が広がる風景は、不安であり脅威です。一方、河川を管理する立場からは「洪水」を「堤防を越える」「破堤する」など計画高水位を越える事態と考えます。計画高水位内であれば、高水敷上に水が到達しても「想定内」なのです。また行政の中でも、河川管理者と公園管理者では認識に違いがあります。私たちが日頃何気なく使う言葉は、すでに専門領域や立場の違いを含んでおり、その意図するところを明らかにしながら話し合わない大きな誤解を生むことを実感しました。石川自然クラブの活動や河川環境管理財団の助成事業を通じてこうした洪水の「スケール」を調査し、整備や管理の内容を整理して、共通認識をもってもらうことを試みてきました。これは普段使われる「きれい」や「自然」の語についても同様だといえるでしょう。

さらに、通常の時間・空間スケールを越え「意図せず」生じた洪水も問題となりました。2009年、自然ゾーンの石川左岸の広瀬地区、大黒用水下流で突然の高水敷のサイクリングロードに水が溢れました。農業用水堰の操作に起因するアクシデントだったとのことですが、降雨と無関係に晴天時に、川とは少し離れた高水敷上で不意に生じた、ある立場から見ると「危険」な状態でした。同様のことは小規模な洪水の際にも発生し、すでにかかなり以前から地域の方々のご存知だったそうです。2010年から水路試掘と調査を行い、2011年に大黒用水路の一部は越流堤状に改修されました。

現在の行政の活動のなかでは、都市公園の整備において自然環境を取り扱うメニューはまだ十分とはいえません。石川においても市民団体の参加は不可欠でした。富田林の自然を守る会をはじめ、里山倶楽部などで活動する主力メンバーを中心に活動が続け、2000年に市民講座を開催、その講座生を母体として「石川自然クラブ」を発足させ、石川の自然観察、地形・植生・昆虫調査など、基礎的な自然環境情報のストックを継続してきました。さらに都市公園の計画設計、管理運営へ、積極的に市民参加活動を行って来ました。当初は「自然保護＝反対運動」という認識もあったようですが、石川の自然環境に関する基礎情報を継続的に把握し、それを提供できたこと、それに基づいて計画への助言とサポートができたこと、さらに計画代替案の提案を行ってきたという活動が、現在の、官民協働の体制を作りあげたと思います。計画案の検討と代替案の提示において、私は、少しは力になれたかな…と思っています。

コミュニティとの連携についてもスケールが問題となってきます。石川河川公園は府営公園であり、府が管理する大規模施設で、広く一般の「府民」を対象とする公園施設といえます。しかし堤内地にお住まいの方々からすれば、地域の公園、災害時に自分たちの生活に影響を及ぼす災害の源であり、生



石川流域フォーラム



改修された大黒用水路

活に密着した防災の「要」でもあります。都市公園という施設・サービスの提供と防災施設。この異なる面をもつ石川河川公園は、周辺住民、地域・流域住民、府民という異なるスケールの対象をそれぞれ意識しながら、整備・管理していかなければならないのです。

管理運営についても、現代の日本におけるさまざまなトピックが石川でも現れています。市民団体への行政の援助は、活動を開始するときには充実しているのですが、「自立」を名目に数年で援助が打ち切られることが多いです。「自立」とは何でしょう？援助無しで活動することでしょうか？民間が公共の活動を担う場合には、その活動が維持されるために少なくとも必要な経費は継続して補助されるべきではないでしょうか？また公共施設やサービスへの民間資本の導入や指定管理者による管理の課題も見えてきました。石川河川公園も指定管理者が管理していますが、価格を適正に抑えることと質を高めるという管理の「価格」と「質」の課題、そして活動の継続と長期的な視野からの判断という「一貫性」の課題など。石川の活動を通して見えてくることは、どれも現代の日本の公園緑地の課題に関わる根深いものです。現在指定管理者の選定は、基本的に点数評価ですが、これらの問題を前にしたとき、学識経験者の肩書きと判断の重さを感じざるを得ません。

2. 日本の「歴史」と石川

私には今年4月に小学6年生になる息子がいます。最近彼は、日本の歴史の勉強を始めたのですが、日本の歴史のそこここに、実は南河内が、石川が関係していることを教えると驚いています。

2009～10年、大阪芸術大学教養課程で「南大阪風土論—南河内の風土とランドスケープ」という授業を受け持ちました。かつて、川村二郎先生が同様の授業を担当されていたことを考えると恐れ多いのですが、これまで石川とのかかわりのなかで断片的に知り得てきたことを取りまとめつつ、「石川を軸に」日本の歴史についてお話しさせていただきました。

石川河原のアケボノゾウの足跡化石と氷期間氷期…。日本列島が大陸から離れ誕生する歴史と関連したサヌカイトと二上山・株山遺跡、そのサヌカイトを石器へと加工する工房であった古市翠鳥園遺跡、日本最初の旧石器遺跡になりそこねた国府遺跡…。石川流域の河岸段丘と石器／縄文／弥生時代の遺跡と現在の神社の立地特性…。縄文海進と稲作文化の伝来。古市古墳群、野見宿禰と土師氏、土師ノ里、菅原氏と道明寺の関係…。聖徳太子と近つ飛鳥、遠つ飛鳥…。条里制とため池の分布、狭山池築造とはるか昔の河川争奪…。

東北に出兵した頼義・頼信・義家の河内源氏三代と壺井通法寺の荘園…。南北朝時代の「悪党」楠木正成と千早城…。室町・戦国期は自衛の村「寺内町」…。江戸時代、大坂の開発と河川とのかかわりの歴史、大和川付け替えと河内木綿。明治期以降の葡萄栽培開始と郊外都市の発達…。話題は尽きません。

私は歴史が嫌いでした。横浜の郊外に生まれ育った私には、歴史上の建物、事件の起こった場所は雲の上でした

(せいぜい鎌倉幕府か江戸時代以降…)。それを考えると、外環から見える小山が山ではなく人工の古墳(応神天皇陵)であり、イズミヤの駐車場が古市大溝であるこの南河内のランドスケープは、日本の歴史が年号や人名の暗記にではなく、眼に見える日常の風景の延長にあるということを教えてくれます。さらにその歴史と風景の成り立ち、立地や地形・地質と関わりを読み解くことによって、歴史的な風景と共通の感覚を体験できる面白さは、新鮮、貴重で、幸せな状況だといえるでしょう。折口信夫が「死者の書」で描いた輝く石川の流れを、私たちは今でも体験できるのですから…。



復元された100万年前の様子
森山義博 富田林の自然No.5(富田林の自然を守る会) 1992より

3. 日本の「未来」と石川

1995年、阪神淡路大震災から16年経った2011年、今度は東日本大震災の年に、私は東京の工学院大学建築学部まちづくり学科に異動しました。現在、教育・研究活動とともに、東日本大震災の復興

を支援させていただいています。石巻市北上町では、津波被害を受けた方々の新たな住環境の整備について、主に造園・園芸の視点からお手伝いしています。また、七ヶ浜町では、被害を受け、高台へと移転していくかつての集落跡地や農地など、「撤退していくまちの跡地」を公園緑地として整備し、自然を再生させる計画策定に取り組んでいます。こうした取り組みは、今後少子高齢化し、都市が縮退していく日本に生じてくるさまざまな問題への先進的な対処例となるでしょう。と同時に、私がこれまで石川で経験してきたさまざまなことがらや議論もまた、その先端にあるのではないかなと思うようになりました。

石川での経験から、都市近郊での自然復元においては、さまざまな維持管理活動と結びつけつつ、粗放的に管理することで、戦略的に進められることが徐々に分かってきました。その一方で、そうした自然復元の試みを、人が生活するまちの近くで行う場合には、山奥や海辺の、人が生活していない自然地域で行う場合とは、異なる対応が必要であることも事実です。都市空間の生物多様性を高めることは、一方で、それに触れる地域住民や市民に、防犯や安全面での「不安感」を招くことがあります。実際、石川河川公園自然ゾーンにおいても、自然回復しつつある風景を「放ったらかし」で「荒れた」状態だと感じて、上下流の公園のようにきちんと芝生を刈り込んで「きれい」な状態にして欲しいという声を聞きました。自然再生は「荒れた」印象をもたれるのでしょうか…。地域に根づき、なおかつ自然環境を保全・維持・創出する公園緑地のあり方を考えるなかで、計画的に「荒れた」土地が、「荒れた状態」が、生活や安全に支障を及ぼさないという「保証」と、そのための創意工夫こそが、人の生活の近くにある都市公園で自然再生を行う上では不可欠となります。

被災地では「デモシカ公園」という言い方すらでてきています。非居住地域に指定され、営農や業務を行うのも難しい土地…土地利用が決められない、でも防災を考える上で樹林地が必要となるこれらの土地は「公園にでもするか」「公園にするしかないか」との判断から、「緑色」に塗られます。こうした計画の余白ともいえるみどりの背後に、実際にはどのような特徴を持つ自然環境が形成され、どのような生物が生息し、地域住民の生活を守るためにどのような点に注意し、どのような管理をしなければいけないか？考えるべき課題はたくさんあります。そうした問題が今一番顕著なのが河川かもしれません。改めて「河川は緑化のフロンティア」であると思います。

大阪では、自然保全や再生に関するセミ・プロフェッショナルな市民団体が、多数活動されていることは大変心強いです。今後もさまざまな局面で皆さんのお力をお借りしつつ、石川が安全安心できると同時に、自然豊かで魅力的に維持・創出されるよう、微力ながら努力していきたいと思っています。

参考文献：

- 1) 篠沢健太 (1995)：河川は都市緑化のフロンティア．ジャパンランドスケープ 37, pp30-32.
- 2) 川村二郎 (1994)：河内幻視行．トレヴィル.
- 3) 千葉教代，篠沢健太，宮城俊作 (2003)：石川河川公園における住民参加のプロセスとその可能性．日本造園学会，ランドスケープ研究 66(5)pp753-758.
- 4) 千葉教代，篠沢健太，宮城俊作 (2010)：河川堤外地の都市公園における自然回復型ランドスケープデザインに関する考察．日本造園学会，ランドスケープ研究 73(5)pp707-712.
- 5) 篠沢健太・千葉教代・宮城俊作(2011)：自然回復と植生管理を視野に入れた河川堤外地都市公園の計画設計フレーム：日本造園学会，造園技術報告集 6 2011.
- 6) 篠沢健太，宮城俊作，千葉教代 (2012)：河川堤外地に立地した都市公園における植生保全・管理・回復手法と公園利用の連携に関する調査研究．河川環境管理財団河川緑化研究助成 2010-2011 報告書.

石川の生き物講座&自然観察会

寺川裕子

石川自然クラブ／石川“e”公園ネット

大阪府営石川河川公園は、富田林市から柏原市、藤井寺市までの石川河川敷に整備された公園です。その中の金剛大橋から河南橋にかけては「自然ゾーン」として保全活用され、他の人工的な広場などのゾーンと比べると、石川らしい多様な自然や生きものを見ることができます。

石川自然クラブでは、自然ゾーンの生きものなどを対象とした「石川の生き物講座&自然観察会」を、公園の指定管理者である石川“e”公園ネットとの協働で開催しています。

昨年1年間の講座のようすをご紹介します。

「石川の生きもの講座&自然観察会」 開催要項

- ◆日 時 年5回程度 土曜日 13:00～16:30 開催
- ◆場 所 石川河川公園(駒ヶ谷地区) 管理事務所および石川河川敷
- ◆交 通 近鉄南大阪線「駒ヶ谷」駅より徒歩5分。駐車場あり(平日無料、土日祝600円)。
- ◆対 象 小学生以上(小学生は大人のご同伴をおねがいします。)
- ◆人 数 先着20名 (定員に達しだい締め切り)
- ◆参加費 大人500円、小学生200円 (保険代、資料代等)
- ◆問合せ 石川河川公園管理事務所まで TEL 072-956-1900

●第1回 “石川の植物” 6月4日(土) 開催

～ 石川の希少植物 “ミゾコウジュ” ってどんな花? ～

第1回「石川の植物」には約20名の方々にご参加いただき、講師の丸井英幹さん「エコロジー研究所」による石川の植物についての講義を熱心にお聞きいただいたあと、ミゾコウジュの自生地をたずねて、可憐な花との初めての出会いを楽しめました。この日は事務所横の池の水辺にミゾコウジュの群生が新たにみつかる、というサプライズもあり、最後にミゾコウジュの種播きをして初回の講座を終了しました。



＜参加者のご感想から＞

- ・今日の観察会に参加して植物などの名前をもっともっと知りたくなりました。
- ・ミゾコウジュに大発見はとてもおもしろかったです。長く言い伝えましょう。
- ・貴重種がある中で、特定外来種がすぐそばに生息し、お互いに生き抜こうとしている姿を見ることが出来た。
- ・いろいろなしゃしんがとれてよかったです。またきいてみます(6年生)。
- ・いかいな所に(ミゾコウジュの)花がさいていたのとてもおどろいた(6年生)。
- ・ミゾコウジュを学校でもさがしたいと思います(6年生)。



●第2回 “石川の水生物” 7月23日(土)開催

～ 川をガサガサ…いろんな生き物を見つけよう! ～

この日の参加者は21名で小学生にもたくさん参加いただきました。講師は「じゃこ取りネットワーク」の吉村元貴さん。室内講義で川の生きものやカワバタモロコについて勉強し、石川の河原へ出発しました。なにか隠れていそうな草かげにそーっと網を入れて上流からバシャバシャと足で追い込むと、**本日のスター★カワバタモロコ**魚やエビやヤゴ、オタマジャクシなど様々な生きものが全部で18種類採れました。みなさん、石川にこんなに生きものがいるのかと驚いていました。

＜参加者のご感想から＞

- ・「でっかいカメ」や「エビ」を見てたのしかったです。また見つけたい!
- ・かめをみました。びっくりしました。はなのなかがいさかったです。ざりがにをみてうれしかった。
- ・人がいがしたカメや魚は意外と多いとわかった。エビや魚の子どもがいた。次もまた来ようと思いました。
- ・川、魚に興味をもちはじめた息子。とても楽しそうでした。
- ・身近な川について色々を知ることができ興味が出てきました。石川との付き合い方を考えていきたいです。



●第3回 “石川の昆虫” 9月17日(土)開催

～ 飛ぶ虫 鳴く虫 歩く虫 不思議な虫の仲間たち ～

雨模様のお天気にもかかわらず、15名のみなさんにご参加いただきました。講師は、京都大学地球環境学学術研究員の向井康夫さん。室内講義では、川の環境と昆虫の関わりやバッタなどの生き方についてお話いただきました。昆虫採集は雨の合間をぬった短時間でしたが、全部で17種類もの昆虫やカエルが採れ、トンボやバッタの羽の模様・色の美しさに感動したり、カメムシの味の話に驚いたり、石川の虫たちとしっかり対面できた一日でした。

＜参加者のご感想から＞

- ・イトトンボはいろいろ見ますが、今日のアオモンイトトンボは初めてです。自然の青、ほんとにきれいです。
- ・虫好きはあまり多数派ではないので、こんな虫好きの集まりはホッと楽しいです。
- ・バッタ類がみずから足を取るというのははじめてです。ビックリしました。
- ・交び中のトノサマバッタをとった。アマガエルも2ひきとった。雨がふったけど楽しかった。
- ・子供に昆虫などの生きものに関心を持ってもらうために自分が少しでもわかるように参加しています。



●第4回 “石川の動物” 11月26日（土）開催

～ かわいいカヤネズミの巣を見つけよう！ ～

なかなか本物に会えない哺乳類ですが、生息地では様々な動物のフィールドサイン（足跡、巣、フン、食べ跡など）を見ることができます。天王寺動物園の早川講師から楽しいお話をきいたあと、21名の参加者のみなさんと石川河川敷へ。ただの草はらを言われるがままにさがしてみると、ありました！カヤネズミの巣が6個も！足元にはノウサギのフンもみつかって、姿は見えないけれど、動物たちが確かに棲んでいることを実感することができました。

＜参加者のご感想から＞

- ・先生のお話がおもしろくわかりやすく雑学もまじえて、子どもより私の方がぐ～っとひきこまれました。。
- ・あんなに小さい巣なんですネ。こんなに住める所がなくなっているのに今でもがんばって生きているのですネ。
- ・ずっと昔から川原に住み続けてきたカヤネズミたち。知らない間に消えてしまっはいけないと痛感しました。
- ・石川にカヤネズミやノウサギがいたことを、はじめてしてびっくりしました。
- ・石川にもカヤネズミがいるなんて知りませんでした。自然ゾーンをもっとよくしていきたいです。



●第5回 “石川の野鳥” 1月28日（土）開催

～ 冬の水辺の鳥たちとの出会いをもとめて ～

厳寒の季節ですが、初めての方には木の葉がなくて鳥を見つけやすい、大型のカモ類がいるなど真冬が最適です。きしわだ自然資料館からは風間講師ほか3名のスタッフが来てくださり、双眼鏡の見かたや自然観察の手ほどきを受けました。コガモやカワセミ、アオサギやバンのほか、石川河川敷ではハイタカが見られるなど、下見でのオオタカ等も含めて全部で20種の野鳥を観察できてびっくり、みなさんすっかり野鳥ファンになられたようでした。

＜参加者のご感想から＞

- ・ハイタカを見てうれしかったです。オオタカもいるんですね。鳥の話わくわくしました。。
- ・バッタをくしざしにしておいといたはんには、モズということがはじめてわかったのが良かったです。
- ・最初は寒いのでぼちぼちでしたが、レンズから見る鳥達を見るたびに途中から夢中になりました。
- ・カワセミを見てうれしかった。なかなかおぼえられないので、できるだけ参加したいと思っています。
- ・身近な石川のほとりに、きれいな羽の色をした鳥がたくさんいて、自然を感じることができて良かったです。



●番外編 “リースづくり” 12月3日(土)開催

～ 公園のつるや木の实でつくってみましょう ～

クリスマスのリースづくりは生きもの講座の番外編ということで、クラフトを楽しむだけでなく、野山で採取できるつるの種類や公園内で見られる木の实についても紹介しました。(雨天でなければ河川敷にクズのつるを取りに行く予定でした。) つるを巻く作業は「意外に楽しい!」「夢中になった」というのがみなさんの感想です。また、出来上がった土台に赤・青・緑・白と色とりどりの木の实をつけていくと、10名の参加者のみなさんそれぞれ、個性あふれる作品が仕上がりました。



石川流域フォーラム2012

石川の生きもの事件簿

～足跡、食痕、目撃地…事件は現場でおこっている!～

展示：2012年3月11日(日)～20日(火祝) 9:00～17:00

石川河川公園管理事務所 展示ホールほか

■石川の生きもの事件簿：現場はここだ!

■石川標本コレクション(3/11, 18, 20のみ)

野鳥の羽根・仮剥製、昆虫標本、カヤネズミの巣など

■「石川の生きもの講座&自然観察会」の一年

■石川の自然クイズ 展示を見てチャレンジ! ミニ植物図鑑プレゼント



春の河原へお散歩して、石川の“石ころ”でアートしよう!

3月20日(火祝) 10:30～12:00 河原でひろった石に絵の具で動物の絵を描きます。

石川 生きもの対談

3月20日(火祝) 13:30～15:00 "植物vs動物vs野鳥"… こんな石川にしてほしい!

生きものに代わって先生方がケンケンガクガク…

■3/20(火祝)フォーラムのスケジュール

10:30～12:00 春ごと遠足&川のアートクラフト・早川篤氏(天王寺動物園飼育員)

13:00～13:30 こまを回して遊ぼう!・コマ回し名人 石塚康啓氏

13:30～15:00 石川生きもの対談"植物vs動物vs野鳥"

・早川篤氏(天王寺動物園飼育員)・丸井英幹氏(エコロジー研究所)・中村進氏(きしわだ自然資料館専門員)

15:00～16:00 公園ミーティング(来年の講座&自然観察会について)

問合せ・申込み： 石川河川公園管理事務所まで TEL 072-956-1900

「里山の緑（東部丘陵地）」の詳細調査

～ H23 年度「自然環境保全活用調査その10」報告書より抜粋～

1. 緑の基本計画における「里山の緑（東部丘陵地）」の位置づけ

平成19年度に策定された「富田林市緑の基本計画」では、本調査の対象地である「里山の緑（東部丘陵地）」は緑の将来像の主に「田園ゾーン」に区分され、富田林の自然環境を特徴づける緑、富田林の風土を表現する緑として位置づけられている。

「富田林市緑の基本計画」より抜粋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

■緑の評価と課題の整理

富田林の風土を表現する緑は、これまでの富田林市の長きにわたる歴史において、人々の生活の営みや文化により形づくられ、旧来より継承されてきた緑です。このような緑の中には社寺林等の緑や農地の緑、里山の緑等があります。

富田林市内に残されている里地・里山空間は、ふるさとの景観や生態系の保全の上で重要な役割を担っています。

■ゾーン別の緑の基本方針（田園ゾーン）

本ゾーンは農業振興地域・農用地区域をはじめとするのびやかな農地や集落、里山がひろがる地域であり、優良農地をはじめとする良好な農村の緑の保全に努めます。とくに山麓部は、丘陵斜面に沿って谷が奥深く入り込み、谷地田が形成され、特徴的な里山景観を呈しています。また、ため池や樹林、樹園地、里地の社寺林等多様な里山の自然が存在していることから、富田林市を代表する里山の緑として保全・育成を図ります。

■環境保全系統の緑の配置方針

○富田林市の自然環境を特徴づける緑

市域南部の丘陵地は、農地の緑の背後に連なる里山の緑として、谷地田、ため池等と一体となった豊かな自然環境を形成しています。

■景観構成系統の配置方針

○地域の歴史・文化と一体となった緑

里山や畦畔地等の緑は、伝統的な農村景観やのびやかな農地景観の主要素として、富田林の風土が緑の景観を形づくっています。

■富田林市の風土を表現する緑の保全と育成

○里山の緑の保全・育成

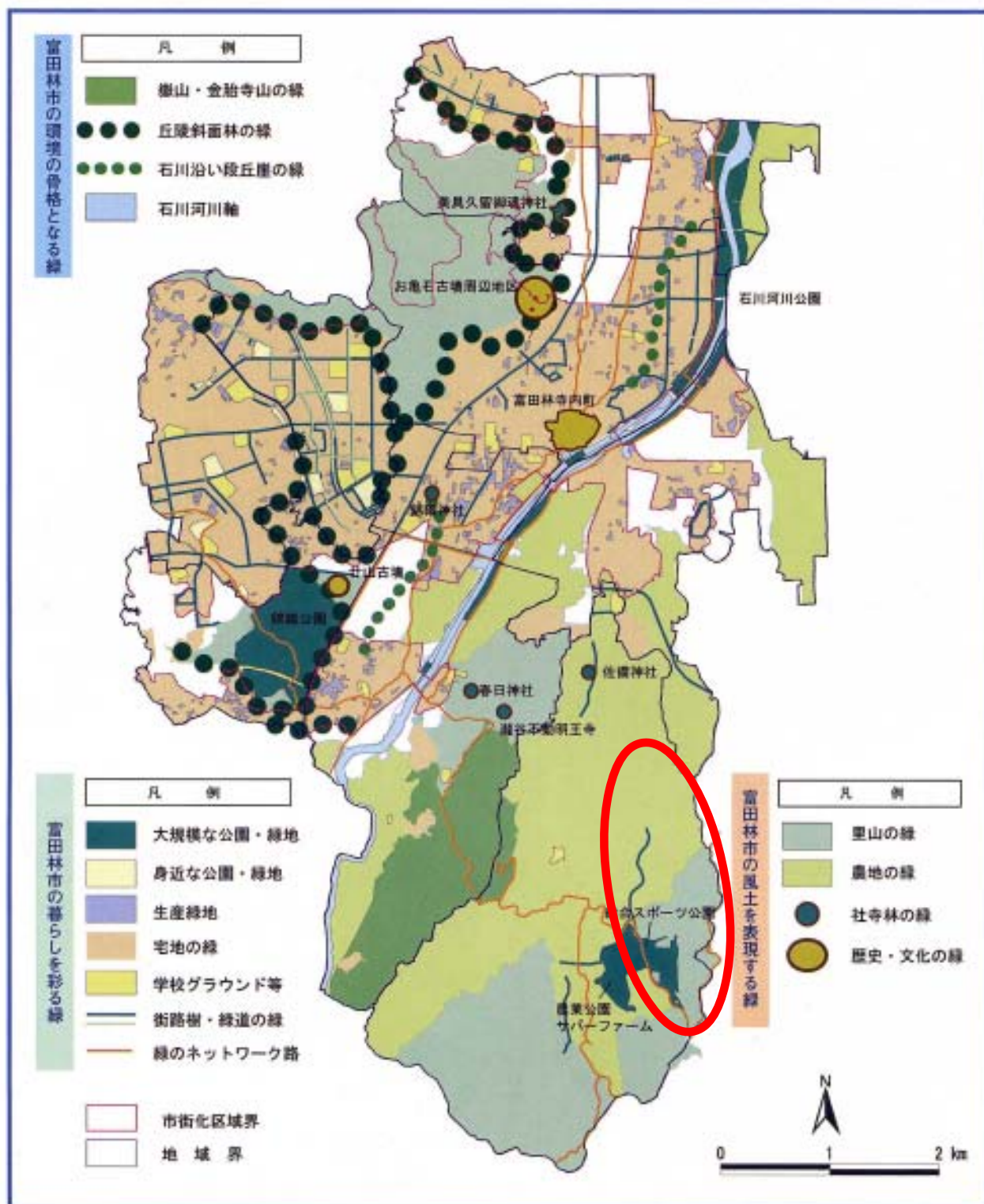
雑木林や樹園地の丘陵やその麓の農村集落、ため池や河川の水辺やその周囲の水田等、里山は富田林の風土に根ざした多様で豊かな環境を形づくっています。（中略）これら里山の緑においては、地域資源を活用しながら都市との連携のもとに自然環境の保全・育成を図ります。

○のびやかな農地の緑の保全

農地は、食料生産基盤としてだけでなく、景観や環境保全当の多面的な機能を有し、地域の自然環境保全に果たす役割は大きいことから、今後もこれら農地の維持と適切な管理に努めます。

＜富田林市緑の基本計画「緑の将来像図」＞

※「里山の緑（東部丘陵地）」は富田林市の“風土を表現する緑”に位置づけられている。



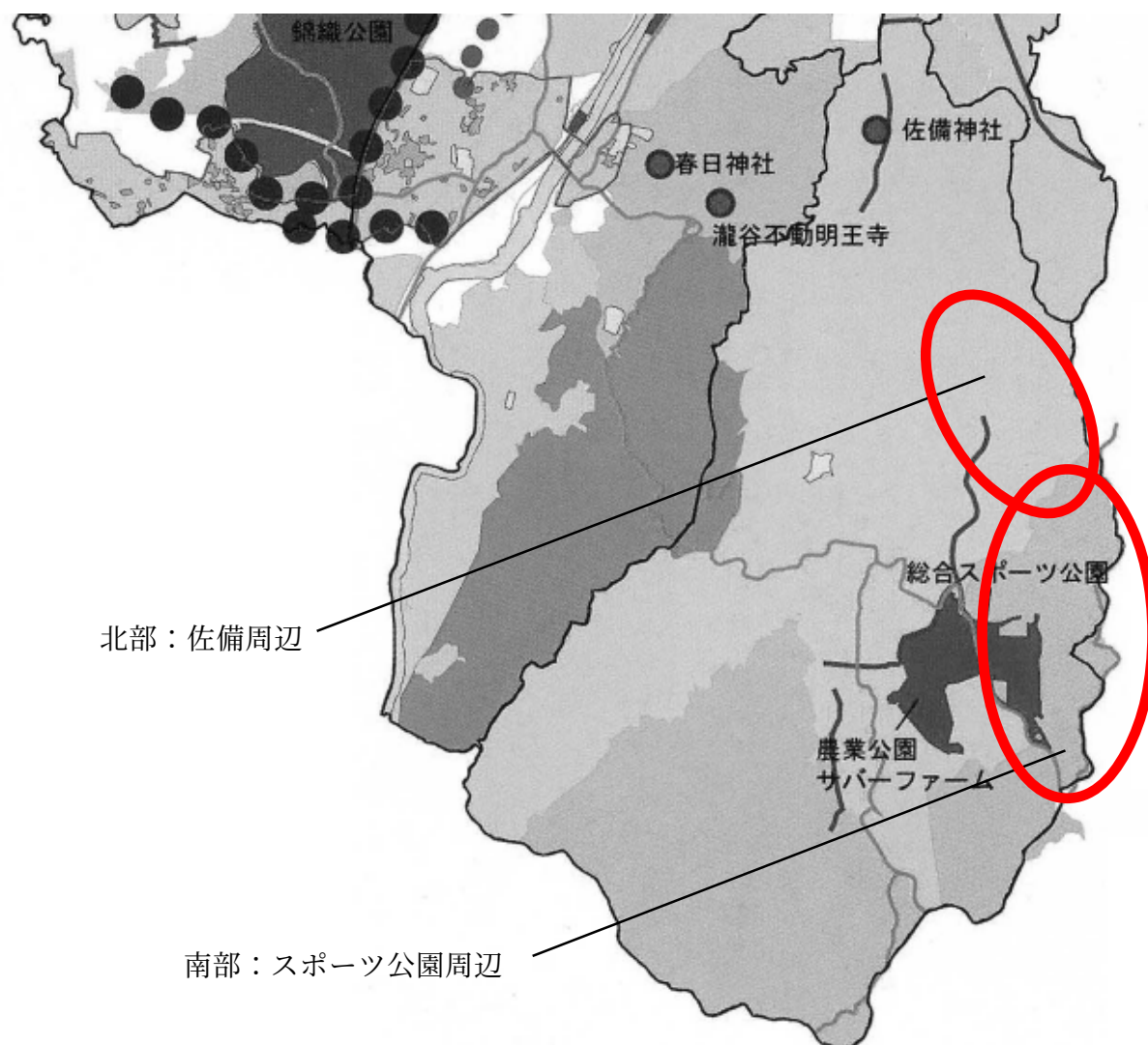
2. 「里山の緑（東部丘陵地）」の詳細調査

(1) 調査対象地の位置

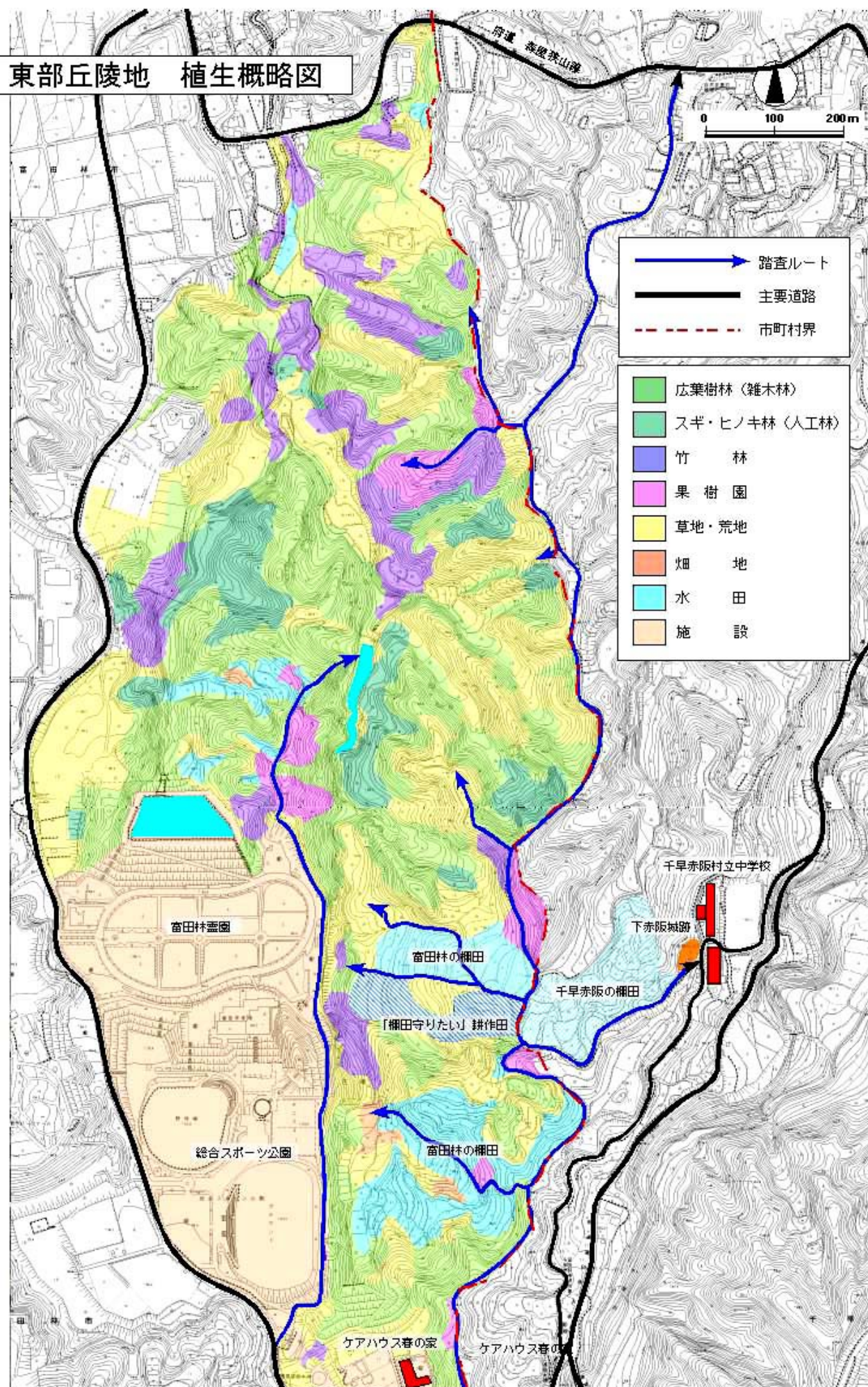
本調査では、「富田林市緑の基本計画」に「田園ゾーン」として区分されている「里山の緑」および「田園の緑」のうち東部丘陵地について、現在の状況や植生、保全すべき自然等について調査を行った。対象地の北部（佐備周辺）は佐備川右岸の低い丘陵地で、南部（スポーツ公園周辺）は、総合スポーツ公園・富田林霊園と谷をはさんで向かい側となる丘陵地である。

(2) 周辺の植生

H13 年度撮影の航空写真をもとに作成した「植生概略図」を見ると、山林の大部分は広葉樹林でその中にスギ・ヒノキ林が点在している。谷沿いを中心に草地・荒地が広がっており、この草地・荒地の多くは放棄された棚田や果樹園と考えられる。現在も管理されている棚田は、「棚田百選」として有名な千早赤阪村側よりもさらに広い面積が、富田林側に立地していることがわかる。また竹林は、この航空写真撮影時にはあまり広がりが見られないが、10 年を経た現在ではおそらくより広範囲に広がっているものと思われる。



東部丘陵地 植生概略図



(3) 緑地の状況

① 北部（佐備周辺）

府道森屋狭山線の南に広がる低い丘陵地で、千早赤阪村との境界に軽トラ程度が通れる農道が棚田方面まで通じている。道の周辺には果樹園や畑地が一部にあるが、その他は雑木林やクズなどのツルに覆われた果樹園跡が目立つ。

<現地踏査> 調査日：H23 年 8 月 24 日



○管理されている果樹園：農家の方が秋の出荷をめざしてミカンの摘果を行っていた。
新しくミカンの苗木が植えられた果樹園も見られた。



○クズに覆われる果樹園：道沿いや丘陵斜面には、かつての果樹園がクズ等に覆われて薺化している箇所がかなり多い。



○尾根上の畑地：一部には手入れされた畑地や栗が植えられた園地もあった。



○チガヤ草地：畑地に隣接する草地や畔には、草刈り管理されたチガヤの中に、アキノタムラソウやツリガネニンジン、ワレモコウなどの畔植物が生育している。



○竹林や造成地：果樹園の周辺に竹林が広がっているところや造成地も見られ、今後の環境変化が懸念される。

② 南部（スポーツ公園周辺）

千早赤阪村の「下赤阪の棚田」に隣接する富田林市域側の棚田地域で、深い谷をはさんで総合スポーツ公園および富田林霊園がのぞまれる立地である。千早赤阪村側よりもさらに急峻で狭小な田畑が広がっており、放棄された棚田や管理の行き届かない果樹園も見られる。

<現地踏査>

調査日：H23年6月2日、7月5日



○下赤阪の棚田：「日本の棚田百選」に選ばれて、展望場所や駐車場が整備されており、観光客のほか美しい風景の写真撮影やスケッチに訪れる人も多い。



○富田林市域の棚田：千早赤阪の棚田と一連になっているが、上の農道からは直接見ることができないため訪れる人は少ない。棚田の枚数や高低差は千早赤阪側を越えるほどで、非常に美しい景観である。



○広大な面積の畔：富田林市域の棚田は、高低差が大きいため田んぼの面積に比べて畔の面積が非常に広くなっており、下から見上げると芝山のように見えるほどである。



○多大な労力を要する水田管理：最小の耕運機すら入りにくい田んぼもあり、その他の重機も入らないため、手作業の田植えや人力での畔補修が行われている。



○素掘りの水路：棚田の上部には、U字溝および素掘りの水路がとり回されている。延長が長いことこれらの水路管理も大変な労力を要する。



○耕作者にお話を聞く：水田の維持管理の苦労話には本当に頭が下がった。



○獣の落とし穴：イノシシの侵入防止に5ヶ所掘ったが効果はなかったとのこと。



○ソバの栽培：一部ではソバの栽培が試みられていた。



○藪化した放棄田：放棄された耕作地は1年も経てばノイバラなどの藪になる。



○周辺の果樹園：梅やキウイなどが植えてあるが草刈り管理が厳しい状況にある。



○谷底のため池：水量は少ないが、佐備方面の水確保に重要な役割を持つ。

3．保全施策の提案

(1) 現地調査結果のまとめ

今回の調査対象地北部の佐備周辺、南部のスポーツ公園周辺ともに、棚田、果樹園、畑地、雑木林などが連なる丘陵地でのどかな田園景観が広がっているが、管理放棄された場所も多く見られる。現在の管理者は高齢であることが多く、担い手がいなくなったあとの管理不足とさらなる放棄地の増大が心配される状況にある。

●千早赤阪村に隣接する棚田

隣接する千早赤阪村の「下赤阪の棚田」は、「日本の棚田百選」に選ばれるなどよく知られているが、富田林市域にもその棚田が連続していて、非常に美しい棚田景観を形成しており、棚田周辺には他の市域では少なくなった畦畔植物も見られる。

しかしながら、その維持管理には、機械が入らない狭小面積の田、大きな高低差、広大な面積の畔の草刈り、耕作後継者の不在、イノシシ等の獣害、素掘り水路の管理など大変な問題をかかえている。そのため、一部の棚田ではボランティアによる管理も試みられているものの、現在の高齢の耕作者（70～80歳台）がいなくなれば棚田の保全は困難な状況にある。

その周辺には、10年以上前に放置されて藪化した棚田や、かろうじて管理が続けられている果樹園なども見られ、すでに景観が荒れつつある状況が見られる。

また、現地調査の際にヒアリングした高齢の耕作者からは、「馬おろし」「蛇越（じゃごえ）」などの特徴的な地名や、かつてはマツタケ山が多く地区内の小高い丘で料亭がマツタケ料理を提供したこと、また総合スポーツ公園整備の際に開発のための買収があったことなどの話を聞くことができた。

●佐備周辺の果樹園等

一帯はクズなどのツルに覆われた斜面が目立ち、現地調査の際に果樹園の手入れをしていた女性にたずねたところ、その多くは放棄された果樹園の跡地だとのことであった。果樹園跡のとなりには竹林の広がりも見られ、全体としては荒れた印象の丘陵地である。

一部にあった現在も管理されている草地には、ツリガネニンジンやアキノタムラソウ、ワレモコウなどの畔植物の群落が見られるが、造成された荒地等にはセイバンモロコシやアレチウリなどの外来種が繁茂している。

今後、果樹園や畑地の維持管理が滞った場合、周辺の竹林やクズ、外来種の侵入により管理放棄された荒廃地が広がることが懸念される。

(2) 自然保全手法の検討

●棚田の保全手法

隣接する千早赤阪村の棚田は、「日本の棚田百選」や「大阪府ミュージアム構想」に認定され、地元農家の組織づくりや棚田ボランティアの育成、ライトアップによるPR活動、棚田保全基金の活用などの施策が実施されている。富田林市域の棚田も千早赤阪村在住者の出作りが多いと聞くことから、これらと連携したかたちで棚田保全のための施策展開を行いたい。特に現在の管理の担い手が高齢化しているため、できるだけ早い取組みが望まれる。

- 棚田保全管理作業への支援（補助金、後継者の育成等）
- 棚田ボランティアの募集・育成、既存団体の支援（助成金、後援等）
- 棚田についての調査記録（所有者等の確認、景観調査、記録写真等）
- 市民への啓発活動（写真展、PRパンフレット等）
- 大阪府や千早赤阪村と連携した施策（PR事業、人材交流、保全基金等）

など

●果樹園、畑地等の管理

藪化している果樹園跡地は放棄されてから年数が経過しており、その再生はかなり困難であるが、できるだけ放棄地を増やさない方策を早急に検討する必要がある。棚田に隣接している箇所では、耕作された棚田を果樹園や畑地に転換して、棚田と一体的な管理を行うことが考えられる。また管理の後継者育成のための支援やボランティア募集、保全に意欲的なNPOと連携する仕組みや助成金などの施策が考えられる。

- 棚田保全と連動した管理
（耕作放棄地の畑地・果樹園化、保全活動の一環としての作業体験等）
- 市民参加による果樹園管理の支援（オーナー制度、作業体験等）
- 後継者の育成支援（担い手塾、ボランティア募集等）
- 竹林の侵入防止策（補助金、NPO等への助成金等）

など

●植物および水生生物の調査

良好な自然環境が残されている棚田周辺の草地では、市内や大阪府域で少なくなった植物が多く見られた。また、周辺の水系やため池についても希少な水生生物（昆虫、魚類、両生類等）が生息している可能性がある。棚田を保全することは、そのような生きものの生息地を保全することでもあり、保全のための基礎データとして植物および水生生物の調査を行うことが望まれる。

- 棚田周辺の畔草地等の植物調査
- 佐備川水系の水生生物調査（棚田の水路、谷底のため池等）
- 周辺住民への聞き取り調査
- 過去の調査データの確認

など

2011 年度 協議会事業報告

2011 年度に協議会が行った活動を以下のように分類することができる。

(1) 自然環境保全活動（生態系保全活動）

①雑木林の林床管理（下樵り）、②人工林(スギ・ヒノキ林)の管理（間伐、枝打ち）、③竹林管理（雑木林および人工林へのタケの侵入防止）、④観察路づくり、⑤草地管理（休耕田とその畦、ため池の土手などの草刈り）、⑥水生生物の保護と育成（水の生きものの池の管理など）、⑦中野町二丁目の石川段丘崖の竹林保全など。

(2) 文化的行事（自然とふれあい、自然と親しむ活動、自然への理解を深める活動）

①竹炭焼き、②シイタケ栽培、③果樹栽培、④米づくり、⑤自然観察（植物・昆虫、野鳥）、⑥水の生きものと遊ぶ、⑦野草を食べる会、⑧里山クラフトづくり、⑨どんど・もちつきなど。

(3) 調査・提言活動、冊子の発行

①自然環境活用調査、②「富田林の自然」誌。

(4) 自然保護活動への支援・援助

①国際ワークキャンプ、②木材破砕機(チップパー)の購入など。

これらの活動について、具体的に、以下に報告する。

1. 自然環境保全の活動

(1) 里山管理作業

富田林「里山ホリデー」と称して、下表のような活動を行った。いずれも午前10時～午後3時頃、場所：奥の谷、参加費：200円（小学生以下は無料）。

富田林「里山ホリデー」

回	開催日	参加人数		作 業 内 容
		大人	子ども	
1	4月24日（日）	21人 (内NICE 5人)	4人	南原クリ園施肥、竹林枯竹伐採
2	5月15日（日）	6人	1人	果樹の丘の草刈り
3	7月10日（日）	16人 (内NICE 6人)	4人	モウソウチクの運搬、竹割り、杭づくり
4	9月25日（日）	11人 (内NICE 7人)	0人	モウソウチクの伐採
5	12月 4日（日）	18人	15人	ミカンの収穫。
7	2月26日（日）	18人	3人	ミカンの剪定・施肥、果樹植樹（果樹の丘）、竹炭焼き、タケの玉切り・竹割り、草刈（池田の畦）
8	3月25日（日）	人	人	シイタケ植菌

(2) 自然観察路の整備

日時：1月29日（日）9時～13時頃、場所：奥の谷、参加費：200円（小学生以下は無料）、参加者数：大人11人、子ども2人。

山林から間伐材を運び出し、玉切りし杭を作って「果樹の丘」から「つつじの尾根道」への階段の補修を行った。また、薪づくりや落ち葉集めも行った。この行事は、勤労者山岳会「嶽の会」が中心で計画し、協議会の主催行事として実施した。

(3) 中野町の石川段丘崖の竹林整備

2010年度は竹林周辺および中央の通路を切り開くことができた。2011年度は新しくチップパーを購

入し、タケのチップ化を行い通路に敷く作業に着手した。協議会としての作業は以下の日程で行った。

4月17日(日)9時～12時、大人9人(東側通路の枯竹の処理、頂上部平坦地の枯竹の処理)。

5月24日(火)9時～12時、大人4人(東側道路方面に倒れた竹の処理、林内の枯竹の整理)。

6月7日(火)9時～12時、大人8人。

7月19日(火)9時～12時、雨天のため中止。

9月18日(日)9時～12時、大人7人(東北部の竹の伐採、上部平坦地の枯竹の整理)。

10月30日(日)9時～12時、大人9人〔東側法面の竹の伐採、上部平坦地の枯竹の伐採、南側広場の竹の粉碎(チップパー)、西側平坦地の草刈り(自走式草刈り機)〕。

11月15日(火)9時～12時、大人5人(南側広場の竹の粉碎)。

12月20日(火)9時～13時、(上部平坦地の枯竹の伐採整理、将来構想についての話し合い、昼食)。

1月22日(日)、9時～13時、大人13人、上部平坦地の枯竹、倒れ竹の伐採整理、将来構想についての話し合い、昼食)。

2月21日(火)、9時～13時、

3月18日(日)、9時～13時、

また、11月～5月の間、NICEの中長期ボランティアとしてフランス人青年2人を富田林の自然を守る会が受け入れ、中野町竹林整備を中心に作業を実施している。



中野町竹林整備

2. 文化的行事

(1) 自然観察(植物、昆虫、野鳥)

① 自然観察会(植物)

主として、植物観察を中心に、下表のような日程で実施した。

いずれも午前9時～午後1時頃、参加費：200円(小学生以下は無料)。

自然観察(植物)

回	行事名	開催日	場所	参加人数		備考
				大人	子ども	
1	自然観察会	4月10日(日)	奥の谷	8人	1人	ルート：瀧谷不動尊駐車場→ミカン園→みかん小屋→つつじの尾根道→NICEな森99→農小屋→みかん小屋
2	自然観察会	5月7日(土)	奥の谷	9人	3人	
3	自然観察会	6月11日(土)	金剛コロニー	—	—	雨天のため中止
5	自然観察会	9月11日(日)	奥の谷	3人	0人	
6	自然観察会	10月9日(日)	奥の谷	7人	1人	

② 昆虫ウォッチング

日時：7月23日(土)15時～21時頃、場所：奥の谷、参加費：300円(小学生以下は無料)、参加者数：大人16人、子ども17人、計33人。

ネットによる自由採集、ライトトラップ、バナナトラップ(バナナを網に入れ山中の木などに吊り下げておく)、夜間ルート観察、「むしむしランド」(市民大学で作成)での観察、標本観察を実施した。

昼間は捕虫網でトンボやチョウチョを捕りながら野山を歩き、



ライトトラップ

網の袋に入れたバナナを木につるした。その後、自然を守る会が採集した嶽山の昆虫標本を観察した。また、自然環境保全協会の自然環境市民大学が作成した「むしむしランド」にはたくさんのカブトムシが羽化していた。夕食(弁当)後、山裾に設置したライトトラップに点灯した。その後、夜活動する虫が木にとまっている様子やバナナトラップにきた虫を観察しながら真っ暗な山の中を懐中電灯を照らして歩いた。

バナナトラップにはドウガネブイブイ、コメツキムシ、トモエガなどが、ライトトラップにはいろいろな種類のコガネムシ類、カミキリムシ類、ガ類などたくさんの虫が集まっていた。

③野鳥観察会

日時：2月19日(日)9時～13時頃、場所：錦織公園、参加費：200円(小学生以下は無料)。
講師：上村賢氏(日本野鳥の会)、参加者数：大人9人、子ども3人、計12人。

(2)自然に親しむ行事

①春の野草を食べる会

日時：4月29日(祝)10時～15時頃、場所：奥の谷、参加費：300円(小学生以下は無料)、参加者数：大人26人、子ども12人。みかん小屋周辺の野草を摘んで調理して食した。

メニュー：ヨメナご飯、ヨモギ団子、ノビルのぬた、セリのおひたし、タケノコの木芽あえ、焼きタケノコ、タンポポ、ノアザミ、ツリガネニンジンなど種々の野草の天ぷら。

②水の生き物と遊ぶ会

日時：6月4日(土)10時～15時頃、場所：奥の谷の「水の生きもの池」、参加費：200円(小学生以下は無料)、参加者数：大人14人、子ども13人であった。

子ども達を中心に、水の生きもの捕りを実施した。メダカ、オタマジャクシ、アメリカザリガニなどがたくさん捕れて子どもたちは大喜びであった。



水の生きもの池で遊ぶ

③自然クラフト(つる細工)

日時：11月23日(日)10時～15時頃、場所：奥の谷、講師：佐々木氏、参加費：300円(小学生以下は無料)。参加者数：大人7人、子ども0人。

午前には蔓の採取、午後は籠作り。雨模様のためみかん小屋で囲炉裏を焚いて行った。人数が少なかったため充実した内容となった。

(3)米づくり体験

奥の谷の水田約300m²を石垣氏から借地し、米づくりを実施した。

①田植え

6月18日(土)、当日は朝から雨模様であったが、田植えの時間帯だけは曇り空となり、大人17人(NICE8人)、子ども4人が参加して楽しく稲の苗を植えた。今年は一人一人が竹で作った定規をおいて植えたので、まっすぐ植えることができた。昼食は代満てのお祝いに昨年とれた米を炊いて楽しく食べた。NICE終末キャンプが合流して実施した。

②稲刈り

日時：10月23日(土)10時～15時頃、場所：奥の谷、参加費：200円(小学生以下は無料)。参加者数：大人13人、子ども4人。

稲刈り、穂だ掛けおよびレンゲの種まきを行った。

③稲こぎ(脱穀)

日時：11月12日(土)10時～15時頃、場所：奥の谷、参加費：200円(小学生以下は無料)。参加者数：大人31人(内NICE19人)、子ども2人。

足踏み式の脱穀機を用いて、午前中に約半分、午後に約半分の脱穀をおこなった。



田植え

(4)交流会

①里山作業と交流会

日時：12月17日（土）10時～15時頃、場所：奥の谷、参加費：300円（小学生以下は無料）、参加者数：大人26人（内NICE9人、シニア自然カレッジ7人）、子ども3人、計29人。午前中は、竹の伐採を行い、午後は広場で鍋で交流した。

②どんどもちつき

日時：1月14日（土）10時～15時頃、場所：奥の谷、参加費：300円（小学生以下は無料）。参加者数：大人29人（内NICE9人）、子ども11人。

最初に書き初めを行い、続いて、どんど焼きを行った。その後もちつきを行い、きな粉餅、あんこ餅、おろし大根餅を作り、参加者みんなで楽しく食べた。餅は、2升臼を5臼で、1臼はよもぎもちとした。どんどの準備は、1月8日（日）に、富田林の自然を守る会の世話人などで行った。



どんど

3. 調査・提言活動など

(1)自然環境保全活用調査 その10

富田林市がNP0法人里山倶楽部に委託した調査に、協議会が合同して調査に参加した。

2011年度の現地調査は、2011年6月2日（スポーツ公園周辺の緑地状況）、2011年8月24日（佐備周辺の緑地状況）、2011年11月15日（千早赤坂村「棚田守りたい」ヒアリング）に実施した。

次のような内容の報告書が作成された。

- ①緑の基本計画における「里山の緑（東部丘陵地）」の位置づけ、
- ②「里山の緑（東部丘陵地）」の詳細調査〔(1) 調査対象地の位置 (2) 周辺の植生 (3) 緑地の現況〕、
- ③保全施策の提案〔(1) 現地調査結果のまとめ、(2) 自然保全手法の検討〕、参考資料〔「棚田守りたい」通信、「下赤坂の棚田」とは、「棚田ふるさと保全基金事業」について、「棚田ふるさとファンクラブ」活動案内、「棚田夢灯り 2011」チラシ。〕

(2)冊子「富田林の自然」No.10の発行

下記の内容で、「富田林の自然」誌No.10を発行した。

知識と知恵の融合（岸本忠三）、中野町の竹林を地域の憩いの場に（グラビア）、石川と日本と私（篠沢健太）、石川の生きもの講座&自然観察会（寺川裕子）、「里山の緑（東部丘陵地）」の詳細調査 H23年度「自然環境保全活用調査その10」報告書より抜粋、2011年度協議会活動報告、協議会参加団体の活動報告、。

4. 自然保護活動への支援・援助

(1)国際ワークキャンプ

「国際ワークキャンプ大阪太子・富田林2011」が、富田林の自然を守る会、大阪自然環境保全協会太子町葉室里山クラブ、NICE（日本国際ワークキャンプセンター）の共催で、8月6日（土）～20日（土）の間、奥の谷と太子町山田で実施された。8月6日（土）～13日（土）の間を富田林の自然を守る会が担当して、奥の谷で開催された。

8月6日に歓迎会が行われ、富田林市から産業環境部部長、みどり環境課長、みどり公園係長が来賓として参加、市長からのメッセージが紹介された。外国人4人（韓国、台湾、メキシコ、スペイン）、日本人2人（京都、埼玉）の6人が、奥の谷の小屋（みかん小屋）および中野町の古民家に宿泊して、雑木林の下樵り（約350㎡）、雑木林に侵入したモウソウチクの伐採、中野町の竹林整備を実施した。ワーク以外にはスライドショー（奥の谷の四季）、ディスカッション（各国の環境問

題)、クラフトづくり(竹細工)、じないまち見学を行った。その他スタッフを含め、地元などから、延べ約 161 人の参加があった。協議会からキャンプ運営のための援助を行った。

(2)参加団体への支援

(3)木材破碎機(チップパー)の購入

里山に侵入しているタケの伐採処理および中野町の竹林整備に必要な木材破碎機(チップパー)を市からの助成を得て購入した。2011 年度は中野町の竹林整備に活用している。



国際ワークキャンプ(昼食風景)

5. 会議

2011年度(平成23年度)の役員会および総会を以下日程で開催した。

(1)役員会

① 4月13日(水)、② 5月20日(金)、③ 6月17日(金)、④ 7月15日(金)、⑤ 9月16日(金)、⑥ 10月21日(金)、⑦ 11月18日(金)、⑧ 12月16日(金)、⑨ 1月20日(金)、⑩ 2月17日(火)、⑪ 3月16日(金)。(いずれも 16:00～18:00)。

(2) 総会

3月23日(金) 午後7時～9時、庁議室

＜協議会参加団体の活動報告＞

金剛の自然環境を守り育てる会

府営錦織公園と金剛伏山台住宅地にはさまれた緑地に生息していた絶滅危惧種のオオタカが大規模な住宅開発（旧ゴルフ・テニス練習場）により自然環境が破壊され、再び野鳥などが生息できる環境を取り戻すことを目的に活動しています。

活動内容

(1)地元有志提供の休耕田を利用し無農薬有機栽培を冬季灌水水により多様な生物の再生と食物連鎖の充実に取り組んだ。

(2)土いじりをする機会の少ない地域の子供に生き物の宝庫となる田んぼ作りをすることにより、里山の生物多様性の再生、野鳥などの生息環境の維持をしてもらうため、寺池台小学校5年生92名とお米の出来るまでの事前学習のうえ、田植えから稲刈り昔ながらの足ふみ脱穀や唐箕などを使いすべて手作業に取り組み、年末にはしめ縄作りで1年間通して農業体験を行った。

(3)田畑周辺のビオトープ作りによる、メダカ、ドジョウ、タニシ等の生息できる環境整備により、アオサギ、シラサギ、マガモなど時々田んぼ近辺を飛翔している。

(4)里山の風情を維持すべき3号公園内の笹刈り、清掃、遊歩道（ふれあいの道）両側の花壇の土壌改良と花苗の植え付けを春、秋季に実施した。



田植え

連絡先：福地康二・ ☎ 584-0073 富田林市寺池台 3-23-1・ TEL/FAX：0721-29-3571

富田林の自然を守る会

協議会主催の行事として、里山ホリデー、自然観察会（植物観察、昆虫ウォッチング、野鳥観察）、米づくり（田植え、稲刈り、稲こぎ）、生きもの水辺づくり、野草を食べる会、里山クラフト、どんど焼きともちつき、中野町竹林管理などを主体的に取り組んだ。

会独自の事業として次のことを取り組んだ。①モニタリング1000（植物およびチョウ；大阪自然環境保全協会の方々の協力のもとに実施した）、②果樹園の管理（クリ園、ミカン園、果樹の丘）、③金剛コロニー梅園草刈り、④平日の里山管理作業（第1金曜日；シニア自然カレッジから多くの方々の参加があった）。

外部団体との協働・共催の事業として次のことに取り組んだ。

①国際ワークキャンプ（NICEとの共催）、②NICE週末キャンプ（NICEとの共催）、③NICE中長期ボランティア（フランス人2人）の受け入れ、④自然環境市民大学（大阪自然環境保全協会）の受け入れ、⑤保育園の遠足（大阪市内の保育園3園）、⑥小学校野外学習（彼方小）、⑦学童保育里山体験（彼方学童クラブ、川西学童クラブ）、⑧富田林市子供会連合会里山体験（雨のため中止）、⑨いずみ市民生協里山体験、⑩ボーイスカウト里山体験（富田林および大阪市内）、⑪シニア文化塾（自然観察）、⑫シニア自然カレッジ（七草、里山作業）、⑬市民大学OB会、⑭自然のみかた研究会（里山生物調査）。

また、地域との協働の取り組みとして、ため池の土手の草刈り（水利組合、NICE）を行った。

ひろとん（市民公益活動わくわく広場 in とんだばやし）に参加し展示を行った。



自然環境市民大学での発表

連絡先：田渕武夫 ☎ 584-0024 富田林市若松町 4-16-21 TEL/FAX 0721-24-7960

特定非営利活動法人 里山倶楽部

里山倶楽部は、「好きなことして、そこそこ儲けて、いい里山をつくる」をコンセプトとして、里山の保全管理や環境教育に関するさまざまな事業を行なっています。会員は約250名。活動グループのひとつ「とんびくらぶ」では、龍泉寺近くの果樹園で里山初心者が楽しみながら草刈りなどの手入れや果物の収穫などを行なっています。

＜講座および自由参加活動＞

●里山の学校（里山基礎講座） ●森林ゼミ（人工林管理） ●里林班（雑木林管理） ●弘川千年の森（協働事業） ●里山キッズクラブ（子供対象）

●とんびくらぶ（山遊び・山仕事体験） ●桜とりすの森（ニュータウンでの緑化活動）

●森安（安全技術技能講習） ●源流米パラダイス（棚田の保全活動）

＜生産販売事業＞

●里山事業部（森林作業請負、炭・薪等の生産販売）

●里山倶楽部自然農場（無農薬米、野菜等の生産販売）

＜まちづくり・調査研究活動＞

●里山バイオマスエネルギー事業部（薪炭林のエネルギー化研究）

●里山環境教育オフィス（企業・行政との協働事業、ワークショップ等の受託事業）

連絡先：寺川裕子，〒584-0024 富田林市若松町4-20-6，TEL/FAX 0721-25-3128



龍泉での活動風景

石川自然クラブ

石川自然クラブは、石川の自然について学び、考え、調べ、遊び、行動することを通じて、石川本来の川の流れや河原の自然環境をとりもどし、地域の暮らしと共生する自然豊かな川づくりを行なうことをめざして、以下のような活動を行っています。

①石川の自然や生きものについての学習・観察・調査

②子どもたちが石川の自然を体験できる機会の提供

③石川の自然についてのPR活動

④石川の自然にふさわしい整備や管理についての共生型技術の検討・提案

⑤地域の人たちや市民団体、行政や専門家との協働の場づくり

⑥石川流域におけるネットワーク活動

石川の自然についてパネル展示や標本等で紹介する「石川流域フォーラム」や、植物・魚・昆虫・動物・野鳥の自然観察会、「石川こども自然隊」を開催しています。また、「石川自然公園自然ゾーン計画運営協議会」では、行政や地元町会と協働して石川の自然についての様々な提言や取組みを行っています。



石川の生きもの講座&自然観察会

連絡先：笠原英俊，〒584-0086 富田林市津々山台1-5-1，TEL/FAX 0721-29-7894

富田林勤労者山岳会 嶽の会

＊富田林の自然を守る市民運動協議会に参加する団体としての活動

2012年1月29日。午前9時から13名（労山5名、フランス人ボランティア2名を含むその他8名）の参加で、自然観察路の補修等を行ないました。

作業内容は、①山から間伐材を運び出し、皮むき、玉切り、杭作り、②果樹の丘からツツジの尾根道までの階段補修、③伐採してあったコナラの枝を薪に、④堆肥用の落ち葉集めです。

昼食は鶏と豚と野菜たっぷりの味噌風味鍋。最後には、黄そばを入れて、全員のおなか一杯。初めての参加者も楽しく作業・交流ができました。



観察路の整備

＊登山ハイキング等の活動

6月金剛山のクリーンハイキング、9月には延べ1万人が参加した障害者登山が第30回（30年）で無事終了。その他、穂高岳5月、北岳6月、苗場山・鳥甲山10月、氷ノ山11月、論鶴羽山（淡路島）等に登りました。（自然保護担当 上角 敦彦）

連絡先：上角敦彦，〒584-0024 富田林市若松町4-6-29，TEL 0721-24-8757

竜泉・里山クラブ

「竜泉・里山クラブ」は、自然環境保全と資源の循環型利用及び果樹園の作業、体験学習講座等を目的として1998年4月に錦織公園自然友の会より別組織となりました。現在会員数38名。当クラブでは、

遊び心を大切に楽しみながら、自己責任において、体力に合った活動をして地域に貢献する。会員相互の親睦をはかり、地域の自然との調和を図りながら自然をより豊かに育み、また地域の果樹園のお手伝いをし、地域との交流を深く進めてまいります。地域住民及び子供たちに体験学習講座を設けることにより、自然との関わり方を経て自然環境教育に役立つものと思い、その知識を得ることにより動植物との共生及び資源の大切さを知ることができる。

◎主な活動内容 竹林・雑木林の間伐及び下草刈り。小中大学生、一般市民の体験学習講座。竹木炭焼 竹酢液作り、みかん采果作業、枝焼作業、自然材料による工作、クリ栽培、シイタケ栽培、植樹等

◎活動本拠地の施設 横型改良窯2基、土窯1基竹酢液蒸留釜1基、高熱窯1基、風力発電1基

太陽光発電、雨水浄化設備、◎体験学習及び講座実績 主な団体：シニア自然大学環境科、西大和学園中等科、富田林の自然を守る会。千早赤坂村森林組合「竹飯盒でご飯を作る体験」

活動日 毎週水曜日、第2・4土曜日 9：00～15：00 会費 入会費1,000円・年会費3,000円

主な活動場所 富田林市竜泉

世話人代表 嶋名孝美

事務局 〒589-0022 大阪狭山市西山台3-3-14 藤田貞夫 Tel 072-366-0995



くぬぎ植林地2006～2011 里山クラブ本拠地にて

富田林の自然を守る市民運動協議会

富田林の自然を守る会
特定非営利活動法人 里山倶楽部
石川自然クラブ
富田林勤労者山岳会「嶽の会」
金剛の自然環境を守り育てる会
竜泉里山クラブ

オブザーバー
日本国際ワークキャンプセンター関西事務局（関西N I C E）

事務局
産業環境部みどり環境課
〒584-8511 富田林市常盤町1番1号
TEL 0721-25-1000（内431）

富田林の自然

2012年3月 発行
発行 富田林の自然を守る市民運動協議会